

〔愚昧記〕仁安四年元嘉應二月十三日庚子皇太后宮行啓日吉社之日也略○今日内大臣宗盛大宮

大夫乘手輿供奉奇怪事歟到大宮大夫彌不可然歟近代之法諸事如此爲怨爲歎耳

〔源平盛衰記 二十三〕入道申官符事

九月四年治承 四日戌時三太政入道清盛手輿ニ乗新院倉高ノ御所ニ參テ申ケル略○下

〔玉海〕治承四年十二月廿六日甲辰未刻參女院御方依行歩不叶用手輿如例

〔古今著聞集 飲食 十六〕文治の比後徳大寺實定藤原の左大臣右大臣一本補におはしける時徳大寺の

ていに作泉をかまへられて申御門左府藤原へ案内申されければわたり給にけり略○中亭主

手輿を用意してひとへかりぎぬきたるさぶらひ六人にかゝせて左府の車のもとへむかへに

まいらせられたりけるに玄きりにのがれ申されけれどもあながちに申されければのりて泉

へわたり給ひけり

〔増鏡 二 新島守〕中院御門土は略○中そのとし三年承久うるふ十月十日とさの國のはたといふ所にわた

らせ給ぬ略○中いとあやしき御手輿にてくだらせ給

〔葉黃記〕寛元四年五月廿日丁丑上皇嵯峨自今日七ケ日可御參籠八幡也略○中及徹明弘御所南中

門廊儲御輿手輿形立柱四本取放也其體如常御力者十八人件御輿去四月御幸時圓滿院宮被進御

但彼御輿之上或張唐油單是可常綱代也又同御時有造付屋形和以金銅被透菊八

葉是天王寺御幸之時被用之可有袖之由前内府源通光被申之然而但常例如此

〔吾妻鏡 四十七〕康元二年元正嘉十月二日壬午今日大慈寺供養也略○申午一點大阿闍梨三位僧正

頼兼到南門外橋下之際遣手輿退紅丁六令移乘之

〔吉續記〕正應二年九月七日新院宇多御幸上御堂南禪被用御手輿被撤御

〔後伏見院御記〕延慶三年十月六日己酉今日余參八幡宮 七日今日可歸京也略○中里神樂了起坐於東鳥居下乘手輿參藥師堂手輿之間御劔猶公春朝臣持之不令持隨身是手輿准歩行之故也